仇討

井上ひさし

中央公論社

仇討（あだうち）

定価六八〇円

昭和五十八年十一月十五日初版印刷
昭和五十八年十一月二十五日初版発行

著者　井上ひさし
発行者　高梨　茂
印刷　三晃印刷
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京　二―三四
©一九八三　検印廃止
ISBN4-12-001254-9

仇討（あだうち）

装幀　安野光雅

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

時　江戸後期

所　常陸国牛久沼（ひたちのくにうしくぬま）

登場人物

及川孝之進（牛久山口家家中・火之番役）　蚊
糸（孝之進の新妻）　あでや蚊
神右衛門（孝之進の父）　はなや蚊
静（孝之進の母）　しとや蚊
登世（孝之進の伯母）　おおら蚊
山崎蔵人（牛久山口家家中・糸の父）　ほがら蚊
岡部又兵衛（牛久山口家家老）　なんと蚊
伊藤銀蛾（牛久山口家藩儒）
権助（及川家若党）　蚤
お種（及川家下女）　その嬶
江戸の薬売（じつは公儀巡見使）

仇
討

1　高砂

朗々と祝言小謡。

山崎蔵人　高砂や、この浦舟に帆を上げて、この浦舟に帆を上げて、月もろともに（突然、涙声になる）出で潮の、波の淡路の（声詰まって啜り上げる）……。

啜り上げる声すこし遠退き、代って聴取者の耳許で、

お種　権助さん、ごらんよ。山崎蔵人様が泣いておいでだよ。御殿様の御陣屋お固めのお侍方の総大将、城代御番頭の蔵人様が玉のような涙をほろほろ

とお膝の上に落しておいでだよ。

権助　あの、涙の数珠玉をよっく見ておくんだぜ、お種さん。蔵人様が涙をおこぼしなさるのは、後にも先にも今日の御婚礼がただ一度のことだろう（トこれも涙声になって）、滅多に拝むことの出来ねえ見物だァ。

お種　おや、権助さんまで貰い泣きだ。

権助　今日はたっぷり泣かせて貰うのだ。権助がこの及川家に若党奉公に上って四十年、その間ずうっと家の御隠居様と蔵人様の、他人でありながら実の兄弟以上に親しい交際ぶりを傍から眺め暮してきた。だから泣けてもくるのだ。下女奉公に上って未だ足掛け五年のお種さんとは、大いに事情がちがうわい。

お種　また先輩風を吹かせる。

権助　おう、吹かせたくもなるさ。いいかね、お種さん。当家の御隠居様、及川神右衛門様と山崎蔵人様とは同い年、共に神童の誉れ高く、学問でも、剣術でも、また例えば慰み事の将棋でも、常にこの常陸国牛久の山口の御家では一二を争う御腕前。たがいに互角。それでいてお二人は双子か何かの

ように仲よくて、この牛久沼あたりじゃ、「あの二人は前世では、たぶん下駄と鼻緒、鍋と蓋、桶と柄杓、とにかく二つで一組の何かだったにちがいない」という評判が立ったぐらいだ。

お種 いやだよ、権助さんは。泣いて、喋って、ものをたべて、三つのことを一緒くたにしちまうから、口の中のものが四方八方へ飛び散ってしまっているじゃないか。

権助 (構わず)十六歳の春にお二人は義兄弟の契りを結ばれて、「将来、それぞれが息子と娘を得たら、きっと妻合せよう」と神文かわして誓いなすった。その誓いが、本日、当家の若主人孝之進様と山崎家のお糸様との御婚礼でついにめでたく果された。これが嬉しくなくてどうする。傍にいるこの権助でさえ嬉しくて涙をこぼすのだ、当のお二人がお泣きあそばすのは当然すぎるぐらい当然だろうじゃないか……。

お種 権助さん、家の御隠居様も泣いておいでだよ。

権助 だからたった今、言ったろうが、泣いて当り前だって……。や、鮒の雀焼がうまい、やはり鮒はここ牛久沼にかぎるね。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

喬り上げる声が近づいてきて、

山崎蔵人　……波の淡路の島影や、遠く、遠く、遠く……。

神右衛門　蔵人、この神右衛門が助太刀いたそうか。

蔵人　おお、神右衛門、それはよい思案じゃ。頼む。

神右衛門　うむ。

二人　遠く鳴尾（なるお）の沖過ぎて、はや住吉（すみのえ）に着きにけり、はや……。

頬をぴしゃりと打つ音。

神右衛門　なぜ、わしの頬を打つ。蔵人、狂ったか。

蔵人　蚊だ。

神右衛門　カ？

蔵人　神右衛門の頬っぺたに蚊が止まっておったのでな、思わず手が出た。

びしゃり。蚊の羽音興って遠く近くを飛ぶ。

蔵人　素速いやつ……。また逃してしまった。

神右衛門　心遣いかたじけない。桜がまだ散らぬのにもう蚊が出てきおったか。それにしてもあの蚊の奴等の死絶えるこの秋の頃には、のう、糸殿、めでたい知らせを聞かせてくだされよ。

糸　あのう、及川の小父さま、めでたい知らせとおっしゃいますと……？

蔵人　これ、糸、「及川の小父さま」という言い方はあるまい。今日からは、こちらの神右衛門殿がそなたの父御なのだぞ。

糸　あ、はい。

神右衛門　「めでたい知らせ」を別のことばで申さばだな、糸殿、この神右衛門と糸殿の父御の二人をはやくおじいさんにしてくだされ、ということ。お分りですな、糸殿、この願い、きっと叶えてくだされ。

糸　（蚊の鳴くような声で）はい。

蔵人　糸が一人で焦っても仕方がない。花婿殿……。これ、孝之進殿……。

孝之進　はい？

蔵人　機嫌よくお励みめされよ。

孝之進　はい。しかしその前に、さきほどの謡を仕上げていただきたいと思いますが。

蔵人　おお、そうであったな。では神右衛門……。

神右衛門　うむ蔵人……。

二人　（ぴたりと呼吸を揃えて）はや住吉に着きにけり、はや住吉に着きにけり。

右の途中でまた蚊の羽音が近づき、しばらく蚊は小謡に助奏をつけるが如く飛び回っているが、間もなく祝言小謡の声を遠くに残しつつ上昇し、聴取者の額のあたり（無論これはもののたとえ）に止まる。

蚊　やあ、わが同胞のみなさん、及川家のこの大黒柱へようこそ。私は大分以前からここ大黒柱に住居を構えている蚊です。

六匹の蚊の羽音。その中から或る韻律をもって、

雄蚊三匹　わたしたちは雄の蚊です。よろしく。
雌蚊三匹　わたしたちは婦人蚊です。よろしく。
蚊　すると私なぞはさしずめ老大蚊といったところでしょうか。呵々呵々……。
あでや蚊　あでや蚊という新人蚊です。
はなや蚊　はなや蚊という新参蚊です。
しとや蚊　しとや蚊という新米蚊です。
おおら蚊　おおら蚊というぺいぺい蚊です。
ほがら蚊　ほがら蚊という下っ端蚊です。
なんと蚊　なんと蚊という三下蚊です。
あでや蚊　生れは溝の中。
おおら蚊　お得意は急降下。
はなや蚊　休むのは昼日中。

ほがら蚊　飛び回るのは夜夜中。

しとや蚊　好物は西瓜。

なんと蚊　趣味は詩歌……。

蚊　シイカとは漢詩だの和歌だののことですか。

なんと蚊　はい。自分たちのことを詠んだこんな新作があります。お聞きいただけますでしょうか。

蚊　ぜひ、どうか。

五匹の羽音止み、一匹の羽音のみ遠近になりながら、その羽音の移動に合せて、

なんと蚊　いましがた棒振虫からかえりたる未だ為り立ての骨と皮の蚊ァ——

この羽音、瞬時止み、すぐに六匹の羽音興って、

雌蚊　未だ未だ未熟なわたしたちです。

雄蚊　どうかよろしく御指導ください。

蚊　いいでしょう。（羽音、一層盛る）しかし！　浮かれていてはいけません。なぜというに、あなたがたの前途には苛酷な、まことにきびしい運命が待ち受けているからです。その運命を直視なさい！　（羽音止む）御承知のように、私ども蚊の主食は植物の汁です。植物の汁さえあれば私どもは数カ月もの天寿を全うできます。とくに雄は生涯、人の血を吸わずとも充分やってゆくことができる。しかし雌はちがう。雄と目合い交尾した雌は（羽音興る）、お静かに。私のことばを猥らな思いをもって聞いてはいけない。（羽音止む）……ソコを終えた婦人蚊は、卵を産み落す前にどうあっても人の生血を吸わねばならない。人の生血なしでは産卵ができず、したがって子孫がのこせません。そこで雌は、連れ合いの雄が囮になって人の顔のあたりを飛び回って気を惹いている隙に、別の場所にぶつと口鎗を突き刺し生血を啜るわけですが、この及川家では、いま申した蚊のやり口は殆ど失敗に終っています。十中八、九までがむごたらしくも叩き潰されてしまう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo